慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黎明期の経済学研究と福沢諭吉(その一) : 日本経済学史研究序説
Sub Title	The study of political economy in the earliest days of Meiji era and Yukichi Fukuzawa
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.9 (1972. 9) ,p.567(1)- 583(17)
JaLC DOI	10.14991/001.19720901-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19720901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黎明期の経済学研究と福沢諭吉（その一）

——日本経済学史研究序説——

飯　田　　鼎

(1)　日本経済学史研究の方法と前提
(2)　蘭学から英学へ
(3)　福沢諭吉と Wayland の経済学
(4)　初期の啓蒙活動と経済学

（1）

日本経済学史および日本経済思想史研究が，最近とみに盛んになりつつある。日本経済思想史研究は，古い歴史をもつが，これとならんで，経済学のわが国への移殖が，どのような径路を経てなされたか，いわば経済学の「輸入の歴史」として研究をおしすすめる方法が注目を浴びているように思われる。(1) 資本主義の発展が，資本蓄積の面でもあるいは賃労働の創出の点でも，「上からの」(„von oben“) 保護助長によらなければならなかったわが国の場合，市民社会の形成と密接な関係をもつ経

注（1）　西欧経済学のわが国への輸入ないし移植という点で，先駆的業績を発表されておられるのは，杉原四郎教授である。杉原四郎編「近代日本の経済思想——古典派経済学の導入過程を中心として」(1971年，ミネルヴァ書房)。この研究は，杉山忠平「福沢諭吉の経済思想」，および溝川喜一「田口卯吉の経済思想——経済と歴史」の2論文を別とすれば，他の諸論文は，古典派経済学の導入過程の研究であり，わが国における経済学導入史にかんする研究として，先駆的なものとなろう。また，杉原四郎著「西欧経済学と近代日本」(1972 年，未来社）は，主として明治初期の経済雑誌の研究を中心とする経済学導入史であり，きわめて克明である。以上の2著は，実証史学の手法を駆使され，そうした接近方法から，日本経済史研究に全く新しい分野を開拓しようとされる杉原教授をはじめとする各執筆者諸氏の苦心のあとを，われわれは読みとることができる。

また杉原教授は，前著に収められている論文「古典派経済学と近代日本——わが国への古典派導入前史を中心として」と題する論文のなかで，古典派経済学研究史という視点から，日本資本主義の段階区分との照応を念頭におきながら時期区分を行い，文久3年（1863)—大正9年（1920）をもって前史とし，大正9年（1920)—昭和38年(1963)をもって本史としている（前掲書6～7頁）ことは重要である。この点については，同じく本巻の論文，山崎怜「アダム・スミス——ひとの序章——」において，杉原氏の時期区分を，真実一男，市原亮平，本庄栄治郎，大塚金之助，山田盛太郎，舞出長五郎および遊部久蔵の諸氏と比較し，第1次世界大戦を大画期とする点でほとんど共通しており，明治期については日清・日露の両戦争を中画期に，20年前後を小画期とするものがおおい。後者内部の時期区分では，「明治政府の権力的基礎」が確立し，ドイツ思想が導入される明治20年代前後を，日清戦争期よりも重視する杉原説がもっとも直截である」と論じられている。

この指摘そのものには異論はないが，こうした導入期の諸相が，日本資本主義の基盤をなす政治・経済過程とどのようなかかわり合いをもったか，こうした方法論上の問題については，本書に掲載された諸論文の追究は，未だ充分でないような気がする。なお玉野井芳郎「日本の経済学」中央公論社，1972 も有益である。

済学はイギリスやフランス，あるいはドイツの場合とは根本的に異なって，市民階級のイデオロギーとして[2]自生的に生み出されるという道程は，可能ではなかった。日本の経済学研究が，まさに，市民社会形成の過程で，産業資本のイデオロギーとして生長した西欧経済学の移入の上に築かれなければならなかったのは，こうした日本資本主義発展の特殊性からくる制約であり，その制約は，ある意味では宿命的[3]であったといっても過言ではなかろう。

従って日本経済学史の研究が，西欧経済学の輸入ないし移植の過程を無視しては成り立ちえないことは，幕末および維新の頃から第2次大戦後に至るまで，動かし難い厳然たる事実となっており，そのことは，今日もなお，日本の土壌に根ざした経済学の Schule は，存在しているとはいいえない状況にあることをみても明らかであろう。それゆえ日本経済学史の研究が，何よりもまず，西ヨーロッパのいずれの国のどの学説が，どのようにして，すなわち誰によって，移入し，紹介され，わが国における支配的な経済学説となるに至ったか，そしてそれが，その時代のわが国のイデオロギー形成にどのような役割を演じたかを追求することに焦点があてられるのは，きわめて自然であるし，基本的な姿勢としては誤っていない。

だが，日本経済学史研究の方法は，たしかに，上にのべたような制約を担っているとはいえ，経済学史研究の本来の姿が経済学説それ自体の歴史的な発展を研究対象とするものである以上，たんなる輸入もしくは移植の歴史にとどまることはできず，移入された西欧経済学が，わが国の経済過程および政治過程とどのような絡み合い，もしくはかかわり合いをもつに至るか，この点の追求にこそむしろ本質的な問題があるように思われるし，この意味において，日本経済学史の研究は，日本

注（2） わが国において，経済学が，たとえば Smith の経済学が Sir Robert Peel にあたえた影響，さらに古典学派の自由貿易論が Richard Cobden や John Bright の反穀物法運動にあたえた影響，あるいは Malthus の「人口の原理」の「救貧法改正」の理論的支柱としての役割のように，一国の経済政策全体をゆるがすようなスケールでの力を発揮した例をわれわれは知らない。また後進国ドイツの国民経済学者 Friedrich List にみるような，関税同盟の成立を中心とする活動によって，幼弱な産業資本のイデオローグとしての熾烈な実践的意慾を経験することなくして一世紀を経過したようにみえる。その理由は，思うに，資本，賃労働および土地所有という資本制社会を基本的に構成する3大階級が現われる以前に，まさにその階級関係を媒介とする富の研究を課題とする経済学が輸入され，受け容れる土壌が未だ充分に熟しないところに急遽移植されたからにほかならない。

（3） このように云いきってしまうことには，なお，多くの疑問が残るであろう。日本における経済学発達のための諸条件の欠如は，その他の社会諸科学との関連のなかで理解されねばならないという点である。経済学のみならず，すべての社会科学の発展の肥沃な土壌ともいうべき啓蒙思想――たとえば安藤昌益の思想に代表されるような――が，封建体制の崩壊期に，充分な展開をみることなくして終り，幕末にはいわゆる科学思想の発展がみられたけれども，それらは，社会科学の自生的発展に結びつかなかった。しかしこのことは，こうした先駆的な思想に充分な考慮を払わなくてもよいということでは決してない。

なお，この問題について，早坂忠氏のつぎのような表現は注目に値しよう。すなわち，「西欧経済学が狭義の理論としてでなく，それをも含むが，それよりも広い思想として受けいれられたのなら，その思想が多少とも日本に根を下してもよかったように思われるのであるが，事実はそうならなかったのであるが，それは何故か，ということが今日考えられなければならない問題である……。さし当りここでは次の2点を挙げておきたい。1つは，西欧経済学を従来の経世済民の学として，ないし国家学として受容したことそれ自体が，かえって西欧経済学の背後にあって，それを生み出した思想を相対的に無視させてしまったことである。そして今1つは――西欧経済学の背後にある，国家とは区別された社会の意味が容易に捉えられなかったことである（「経済セミナー」10，71/No. 193，90 頁，日本評論社刊，早坂忠「日本経済学史の諸断面」を参照）。

経済思想史および日本政治思想史あるいは日本の社会思想史の研究と密接にかかわっているといえよう。また，日本経済学史の研究が，西欧経済学の移植を前提としている以上，そのいかなる段階での移植輸入であったかに簡単にふれる必要がある。そこでこの点について明らかにするために，われわれはひとまず，西ヨーロッパにおける古典派経済学の成立の事情をふりかえってみよう。

Adam Smith の「諸国民の富の性質と原因についての研究」（"An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776）の出現をもって，経済学が社会科学として誕生をみたとすることが通説とされる大きな理由は，まず第1に，富の概念を金・銀あるいは土地，もしくは農産物というような素材的な富の観点ではなく，労働の生産物という把握によって，労働価値説を体系的に提起したこと，第2に分業論を基柢として，国民生産力の概念を定着させ，資本主義の再生産構造の秘密を明らかにしたこと，そしてその結果として，価値論をもって経済学研究の中心に据えたことがあげられねばならない。そして分業を中心とする国民生産力の概念を，たんに国内市場のみならず，ひろく海外市場を背景とする国際的分業＝国際貿易を媒介とすることによって，その理論および政策の根幹にすえ，生産力を阻む国内的要因に徹底的な批判と攻撃を加えたのであり，ここに重商主義および重農主義学派が，Smith の鋭い批判の前に，科学的経済学成立の「前史」としての地位におし込められた理由があった。重商主義の場合には国際貿易の重視の陰で，国民生産力の観点がなお不明確であり，重農主義者は，国際貿易の視点に欠けていたのである。

しかし，以上のことは，Smith の経済学建設における偉大な貢献であるとしても，何故に，「諸国民の富」をもって経済学の社会科学としての成立の画期とするかについては未だ必ずしも充分な説明ではないように思う。それは，以上のような Smith の貢献によって，彼が近代資本制国家の「政策批判」の学としての基礎を確立したことにあるのではなかろうか。「政策批判」は，後に「政策提案」を予想させるものではあるが，Smith の経済理論はまさしく「政治経済学」として，政策提案よりは，むしろ政策批判の体系にふさわしく，全篇に批判的精神を旺溢させている。市民社会を解剖するための武器である経済学的諸範疇の多くは，すでにその先駆者たちによって把握され，Smith が非常に多くこれに負うとはいえ，国家権力の経済過程への介入を排除する自由放任主義＝経済的自由主義は，思想としては，自然神学や道徳哲学の流れを汲むものであるとしても，政策批判のイデオロギーとして，Smith の経済学の重要な理論的側面をなす。

それゆえ経済学史の研究は，Smith の経済学の成立の時点において，Smith 以前の重商主義，重農主義の歴史的意義を経済学前史として位置づけ，Smith の経済学との関連において把握するところからはじめられるのは，まことに当然であるといわなければならない。その経済学がその理論的体系化と精密さにおいてもっとも高い水準に達した David Ricardo をへて，古典学派が完成の域に達するとともに崩壊過程を辿り，Malthus および J. S. Mill をへて，その理論はかつて Smith の時代において燃えていた若々しい批判的精神を失うとともに，「政策批判」から「政策提案」の学

への展開，古典派経済学の解体と俗流化の途を辿ることとなる。その「俗流化」の意義は，1817年の Ricardo の "Principles" から 1848 年の J. S. Mill の "Principles" までの「空白の 30 年間」に，まさに，成熟したイギリス産業資本のイデオロギーとして，「政策提案」に終始し，従ってみるべき業績を生み出すことなく，労働価値説は，根本的な修正をうけ，生産費説にとって代られるのである。Karl Marx による「経済学批判体系」の樹立とこれと相対立する「限界効用学派」の出現は，イギリスを中心とするヨーロッパ資本主義の爛熟の時期である 1860 年代から 70 年代初頭の政治・経済過程に照応するものであった。そしてわが国への経済学の輸入は，1848 年の J. S. Mill による古典派経済学の解体の時代から，ある意味で古典派経済学の再生ともいうべきマルクス主義経済学およびその価値論においてこれを全面的に対立する限界効用学派の出現に先立つ時期の，いわゆる俗流経済学の隆盛期のそれであった。

以上のように，経済学史の研究は，価値＝価格論を中心とする富の生産・分配および消費に，諸階級が，どのような形でかかわっているかという価値理論を中心とする歴史的の研究であるとともに，それが，その時代の政治・経済過程とどのように絡み合いながら発展するかという，経済思想ならびに政治思想ともからみあうところの政策の研究でもある。

ところで，日本経済学史研究が，一方において，西ヨーロッパの経済学の輸入ないしは移植，そしてそれと密接に関連する政策史の研究であるならば，わが国には何故に，本来の経済学，あるいはその諸萌芽が，たとえば重商主義あるいは重農主義というような体系として発生をみなかったのであろうかという問題をさけて通ることはできないように思われる。市民社会発達の未成熟とこれにともなう近代的統一国家成立のたちおくれの結果として，経済学成立の背景をなす諸科学，たとえば政治学や法律学，とりわけ哲学の発達の不充分さがあげられよう。しかし何よりも根本的な問題は，民族的統一国家[4]——具体的には徳川幕藩体制——の確立の過程において，外国貿易がほとんどみるべき役割を果しておらず，資本の本源的蓄積が，きわめて不充分であり，商人資本およびこれとならぶ初期産業資本が，海外市場とほとんど何の結びつきももたずに，国の内部だけの蓄積によって生長しなければならなかったところに決定的に重要な問題がひそんでいる。従って幕末の時期に，すぐれた経済思想家が輩出したにもかかわらず，彼らの思想は，そのまま経済学の形成のための思想とはなりえなかったのである[5]。経済学の社会科学の成立にとって，まことに不可欠な段階

注（4） 日本資本主義論争において，労農派の主張した「明治維新＝ブルジョア革命」という論理は，徳川幕藩体制の末期を絶対主義とみなすことから出発している。（たとえば，大内力「日本資本主義の成立」，東大出版会）。しかしこのことは，この時期が，日本資本主義の成立史からみれば，まさに重商主義段階に一致しなければならないことになる。しかし本来的な重商主義とは，一方において，国内における産業資本の保護と，他方における海外市場の獲得が，国家権力を媒介として，密接な関係をもつ段階である。しかし，徳川幕藩体制は，仮に，その末期を例にとってみても，これを重商主義の時期とみなすことは無理があるように思われる。

（5） Adam Smith にはじまるイギリス古典学派の壮大な経済学体系にたいして，ドイツ資本主義の後進性の故に苦闘しつつ，自己の「政治経済学の国民的体系」を対置したフリードリッヒ・リストがのべているつぎの言葉は，幕末維新

ともいうべき重商主義が欠けていたことは，その後に来るべき自由主義をきわめて不明瞭なものとし，明治初年のいわゆる自由主義者の思想も，それが「反封建」という意味では一応自由主義であったとしても，重商主義批判の旗手としての強力な経済的自由主義となりえなかった。従って，明治初期における多くの思想家たち，とりわけ，福沢諭吉，神田孝平，田口卯吉，大島貞益などには，さまざまな思想の混淆がみられ，彼らを純粋な自由主義としたり，あるいは，完全な重商主義者ないし，保護貿易主義者として規定することは，きわめて困難であるし，また無理をともなう。またそのような方法が経済学史研究にとって有効であるとは考えられない。むしろ，日本経済学史研究の方法における基本的な問題は，わが国へのヨーロッパ経済学の輸入ないし移植は，それぞれ日本資本主義のどのような局面において行われたか，そしてそれら相互の関連およびそれらが，日本の政治および経済過程とどのようなかかわり合いをもつか，この点にある。

日本経済学史の研究者は，「万民経済学」にたいして，いわゆる「国民経済学」を対置したフリードリッヒ・リストの「ドイツ」が立っていた地位を理解することができる。またこれと同じく，フランス革命の渦中に，Adam Smith の 'Wealth of Nations' を知り，イギリス古典学派の影響下に独特の体系を打ち樹てたジャン・バティスト・セー（Jean-Baptiste Say）が，黎明期におけるフランス経済学において果した役割を認めることができる。しかしながら日本経済学史は，その黎明期において，ひとりのリスト，ひとりのセーを生み出さなかったし，「経済学の国民体系」や「経済学問答」にみられるような独自の経済学体系をもつこともできなかった。そしてこのような日本経済学の性格は，いまもなお，色濃くわれわれの経済学研究に影をおとしているといっては云いすぎであろうか。

の時期，わが国がまさにその民族的独立の危機にあった時期にもあてはまるといえないだろうか。

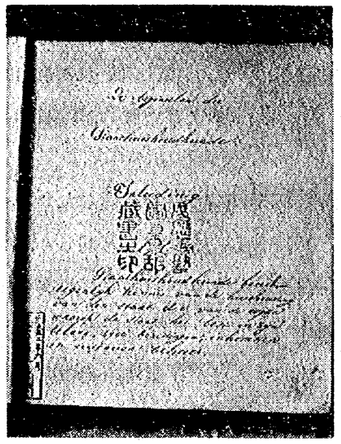
「経済学の諸部門のなかでは，国際貿易と貿易政策との部門の場合ほど，理論家と実践家とのあいだに大きい意見の相違がはっきりとあるところはない。しかもまた，この科学の領域にあっては，諸国民の幸福と文明にかんして，またその独立と勢力と存続とにかんして，これほど重要な意義を持つと思われる問題はない。貧しくて無力な未開の諸国が，主としてその賢明な貿易政策の結果，富と力とにみちた国となったし，他の諸国はこれと反対の理由で，高い国民的名声を持つ立場から転落して無力となった。それどころか，人々の経験した実例では，いろいろな国民は，自国の貿易制度がその国民国家の発展と強化とを進めるものではなかったということがおもな理由となって，独立を失ったり，政治的存在までをも失ったりしたのである。

この問題は現代では，ほかのどんな時代にもまして，経済学のなかの他の諸問題以上につよい関心を抱かれている。なぜなら，工業上の発明と改良との精神，社会的および政治的向上の精神の進歩が速くなればなるほど，停滞的国民と進歩的国民とのあいだの距離はますます大きくなり，遅れたままでいることの危険はますます深くなるからである」（Das Nationale System der Politischen Ökonomie, von Friedrich List, Stuttgart und Tübingen, 1844, 小林昇訳，フリードリッヒ・リスト「経済学の国民的体系」1970 年，岩波書店）43 頁。

しかしながら，たとえば，福沢を例にとれば，西欧経済学をうけいれる態度にかんする限り，リストが，古典学派に対決したときのような緊迫感はないし，民族的危機の意識も，List にみるように鮮明ではない。これはひとつには，福沢の立つ基本的な立場が，幕府の翻訳官として，西欧文明にもっとも早く接する機会をえたけれども，彼は政治にたいしては，きわめて没交渉的な態度を一貫して保持したことによっている。なお，この点については，行論のなかで明らかにされよう。

（2）

日本への経済学の輸入は，偶然の機会を通じてであったといえる。周知のように，わが国においてはじめて経済学の学習を目的としてヨーロッパに留学したのは，オランダのライデン大学において，フィッセリング（S. Vissering）に師事した幕臣津田真道と西周両名であったといわれる。[6] この2人は，福沢諭吉と同時代人であり，また友人であって，広い意味の洋学導入の一部として，経済学が学ばれたという限りでは，福沢の経済学研究の動機とかなり似かよったものをもっている。経済学導入の過程が，幕末維新の洋学熱の昂まりのなかで，多分に偶然的要素によって支配されたということは，経済学研究に関心を示した人々が，ヨーロッパの学説を主体的に学びとり，わが国の経済社会の実情を深く洞察し，その批判の武器としてこれを把握しようという認識——たとえば，フリードリッヒ・リストのイギリス古典学派にたいする視点——にまで，到達しえなかったことは日本の当時おかれていた客観的状勢からしてまことにやむをえないものがあった。ヨーロッパ経済学を導入するにあたっての研究者たちの態度は，広い意味での洋学，すなわち蘭学を基礎とする西洋の医学，物理学，化学，本草学，数学，天文学そしてさらに，築域，鋳砲，造船，操練などのいわゆる兵学などの導入の精神としての実用主義であったということができる。福沢の経済学研究もまた，こうした幕末維新の時期に澎湃として わき上った 洋学研究の 背骨としての 実用主義——のちにこれが「実学」の思想として具体化される——にもとづくものであった。福沢が，洋学の導入による日本の近代化の推進者であり，偉大な啓蒙家であっただけに，その影響力は大きく，維新の政治にきわめて深刻な影響を及ぼしそうなものだが，その日本の政治過程への影響が，さだかでないのは，主としてこの実用主義によるものと思われる。これは後の問題として，ともあれ，ここでは，福沢諭吉の経済学研究を通じて，わが国における西欧経済学輸入の一断面を明らかにしてみよう。



この写真は，ライデン大学，フィッセリング教授について経済学を学んだ津田真道氏が筆記したノートである。大正2年6月，津田氏が慶応義塾図書館に寄贈したものといわれる。

福沢諭吉が，江戸，築地鉄砲州の中津藩奥平屋敷で，中津藩の命令により蘭学塾を創設したのは，安政5年（1858年）の冬であった。福沢が大阪の蘭学塾，緒方洪庵の適塾（適々斎塾）[7] を出たとき，

注（6） 杉原四郎「西欧経済学と近代日本」，（未来社）1972年，5頁，および高橋誠一郎「随筆慶應義塾——エピメーテウス抄——」（慶応通信）1970年，6頁。

同窓の広島の人，岡本周吉を同伴し，江戸に入るとともに共同生活をして，そこに集まった藩中の子弟に教授したことをもって，慶応義塾の起源とみなすことが普通である。[8] 福沢の蘭学への関心は，安政元年，21歳のとき，兄，三之助の勧めによって蘭学修業を志し，長崎に行って，砲術家山本某について蘭学を学び，のちにやはり兄の勧めで大阪に出てここにとどまり，諸方塾において満3年間修業をつみ，中津藩の命令で江戸に出る頃には，適塾の塾長にあげられたほどであった。[9]

中津奥平藩の中屋敷に開かれた福沢塾は，最初は，まことに微々たるものであったらしい。[10] この微々たる福沢塾に，慶応義塾という名前がついたのは，創立から約10年たった慶応4年（1868年）であって，福沢が，塾を新銭座に移転するまでは，正式の名前はなかった。[11]

注（7） 福沢と適塾との関係については，福翁自伝にくわしく物語られているが，彼の適塾入門は，彼の22歳のときであり，安政5年（1858年），江戸に出るまでの足かけ4年，大阪にあって，この適塾で蘭学を学んだ。兄の病死で帰国したりしたため，緒方塾での勉強は，3年足らずにとどまったが，この塾での蘭学研究の生活が彼にあたえた影響は大きかった。

緒方洪庵は，文化7年（1810年），備中足守藩主木下利徳の家臣佐伯瀬左衛門の末子として生まれ，文久3年（1863年），江戸において逝去した。17歳のとき，父が足守藩の大阪蔵屋敷の留守居役を命ぜられたので，父に従って大阪に出て，蘭方医，中天遊の内に入って医術を学んだ。20歳のとき，江戸に下り，坪井信道の門に入って蘭学を学ぶことになり，学問の進歩もはやく，坪井塾の塾頭となった。洪庵は坪井信道の推挙により，坪井の師匠宇田川玄真の門に入り，さらに長崎に行って，オランダ人について医術を研究し，天保9年（1838年）29歳のとき，大阪に出て，瓦町に医業を開くとともに，私塾を開いて蘭学を教授した。「適々斎塾」略して「適塾」と呼ばれた緒方塾には多くの門弟が出入し，適塾開塾25年，その間に3,000人が入門したと伝えられている。そのなかには，村田蔵六（大村益次郎），佐野栄寿（常民），菊地秋坪（箕作秋坪），橋本左内，大鳥圭介，長与専斎，福沢諭吉，花房義質，池田謙斎などの名前がみられるという（慶応義塾百年史，上巻，（慶応通信）1958，34～35頁。なお適塾と福沢との関係については，「福翁自伝」（慶応通信）1958年，53～82頁参照。

（8） 前掲，福翁自伝，83頁。

（9） 前掲「福翁自伝」52～53頁。

(10) 「福沢が家塾を開いた初めのころは，藩の中屋敷の長屋の一戸を借りうけたそまつなもので師弟ともに洋学の道に苦学するという風があった。明治16年，福沢みずから書いた『慶應義塾紀事』には，『安政5年より文久2年の終に至るまで4ヶ年余の間は，生徒の就学する者新陳出入して常に数十名に過ぎず，僅かに一小家塾にして事の記す可きものもなく，且塾の記録さえ詳ならざれば，一切の紀事は文久3年正月より起って，明治15年12月に終るものとす』とある。すなわち福沢塾の入門帳の記録がはじまったのは，文久3年（1863年）の春からであるから，創設から4年余は記録がないので，はっきりしたことはいえない」（前掲，百年史，上巻12頁）。

(11) 慶應義塾の「義塾」の起源について，「百年史」は，つぎのような興味ある叙述をのせている。「『義塾』という呼び名については，これも従前ほとんどその使用例をみないもので，天明7年（1787年），当時17歳の近藤重蔵が同志と協力して開いた年少子弟のための塾を，『白山義塾』と呼んでいるが，これが現に探りえた唯一の使用例である。しかし『白山義塾』は，のちに説くように，全く中国本来の語義にのっとったもので，慶應義塾の場合とは異ることはいうまでもない。『義塾』のほかに『塾校』という語の使用例もある……。『慶應義塾之記』の中に，『我党の士，相与に謀って，私に彼の共立学校の制に倣ひ一小区の学舎を設け』といい，『今爰に会社を立て義塾を創め』とあるのをみてもわかるように，福沢をはじめ，塾の同志者の頭の中には，従来わが国にはなかった共同結社によって建営される学塾組織の構想があり，現に，塾寮の落成も目前にせまり，教授の顔ぶれの目算も立ち，西洋近代の学問を盛った新舶来の教科書も山ほどあり，同志者の心構えも結束も新たに堅いというわけで，このような陣容と組織と内容とをもった学塾を呼ぶに最もふさわしい呼称がほしい。これまで存在しなかった学塾を呼ぶにはまた，これまで使用されたことのない文字をもってこれに当てるにこしたことはない。『義塾』はまことに打ってつけの文字であったといわなければならぬ。

『義塾という語の中国における本来の語義は，公衆のため義捐の金をもって建営する学塾で，学費を収めないものをいう。目的は，公共のためであり，裏づけは義捐の金であり，無月謝で運営される。この語は，元代世相のことを記録した明の陶宗儀の選に成る『輟耕録』中にみられるが，中国近世に現われた上記のような目的と性格とをもつ学塾の呼び名である。ところが福沢が「義塾」なる語に盛った内容，『彼の共立学校』とは，イギリスのパブリック・スクールの組織であろうと推定されるが，パブリック・スクールは，歴史的にみても国家公共の目的で設立されたもので，法律的には基本金のもとに設けられた公共団体によって運営されている私立学校である。要するに，中国伝来の『義塾』

中津藩奥平家は，蘭学に縁の深い家柄である。前野良沢が，明和8年（1771年），杉田玄白らと蘭学解読すなわち，わが国最初の西洋医学書の翻訳，「解体新書」の訳業をはじめたのは，実にこの中屋敷内の前野の家においてであった。[12] わが国の蘭学史上，忘れることのできない，いわば蘭学研究の発祥地ともいうべきこの同じ中津藩邸内に，それから80数年後，福沢が蘭学塾を開設したことは，まことに奇しき因縁というべきであろう。前野良沢を庇護した藩主奥平昌鹿は，英明な君主として知られ，漢学に劣らず蘭学を奨励し，従って奥平藩には，蘭学研究の伝統が脈々と流れていた。ところが，安政・嘉永年間になると海防論が盛んとなり，諸藩はきそって蘭学の学習を奨励したが，中津藩でも佐久間象山に弟子をおくったり，象山を招いて教授をうけたりしたといわれる。[13] その後，松木弘安，[14] 杉亨二[15]の2人が招かれ，蘭学を教授したといわれる。松木弘安，杉亨二らの努力により，中津藩における蘭学の研究は大いに進んだが，たまたまこれらの人々は，いずれも藩外の人であったので，他藩の者を雇うよりは，自藩の福沢を呼べということになり，当時，適塾の塾長をしていた福沢が呼ばれたのであって，緒方塾での同窓，岡本節蔵が，最初の塾長ということになった。

以上のように福沢は，わが国における蘭学研究の伝統，なかんずく，中津藩の蘭学への歴史的に根強い研究関心にはぐくまれて，蘭学に志すのであるが，ただここに興味深いことは，福沢が，何のために蘭学を志したか，具体的に明らかにされていないことである。わが国における幕末の蘭学研究は，ほぼつぎの3つの傾向にわけられる。第1に，長崎を中心とするオランダ医学の研究，第2に，天文学，地理学などをはじめとする医学を除く自然科学の研究，そして第3に砲術，築城法および船舶製造法などを主とする軍事的ないしは海防論的研究である。従って，経済学のような社会科学の研究は，はじめのうちは問題とならず，蘭学者の多くは，以上のような分野について，それぞれもっとも関心のあるところを専攻するために，蘭学に志したと云っても過言ではない。だが，これらとは別に，とくにどのような学問を志すというのでもなく，ひたすら西洋文明そのものにたいする熾烈な関心と憧憬，そしてつきせぬ好奇心に駆られて，蘭学に熱中した若者もまた少くなかったのであって，どちらかといえば，福沢はこうした血の気の多い若者のひとりとして，緒方塾で

なる皮袋に，英国の近代私立学校という新しい酒をもったものである。

明治元年以降，校名に何々の『義塾』と呼称するものが陸続と現われている。明治末年ごろまでに，約百数十の多きをみる。慶應義塾以前に義塾なく，以後にその数が多くて枚挙するに苦しむというわけである」（前掲，百年史，244～246頁。）

注(12)　この問題については，最近の研究として，佐藤昌介「洋学史研究序説」1971年（岩波書店），藤森成吉「近代日本の先駆者たち――幕末の洋学」1972年（新日本出版社），および高橋磌一「洋学思想史論」1972年（新日本出版社）をみよ。なお，幕末の革命的思想の研究のために，日本思想大系55『渡辺崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』（岩波書店）は不可欠な史料である。

(13)　「百年史」（上），50頁以後。

(14)　松木弘安は，薩摩藩主で，幕末にイギリスに留学したが，のちに寺島宗則と改名し，明治政府の外務卿となった。

(15)　杉亨二は長崎に生まれ，緒方洪庵，杉田成卿らに蘭学を学び，のちに蕃書調所，開成所等で教え，維新後国勢調査の事に当り，わが国における統計学の開拓者と仰がれた。

のその青春の日々をおくったのである。[16] 極端に云うことが許されるならば，どのような学問であれ，洋学ならば，いつでもうけいれる精神的準備が，このときすでに福沢のなかに培われていたということができよう。では福沢諭吉は，どのような動機から経済学研究に進むことになったのであろうか。そのためには，福沢の蘭学から英学への転換についてふれておかなければならない。

福沢が，その若き日に，何故に蘭学の修得にその全力を傾けたのか，その動機は必ずしも明白でないが，少くともひとつの動機としては，封建制度への反撥[17]から，蘭学による立身出世を夢みたであろうことは想像に難くない。「父の身分は，……足軽よりは数等よろしいけれども，士族中の下級，今日でいえば判任官の家[18]」と云っているように，その身分は低く，禄高13石2人扶持というみじめな待遇であった。こうした逆境からの脱出をもたらすものとして蘭学による立身が考えられたことは，自叙伝の叙述からも窺うことができるが，その蘭学が，国際語としてはすでにその役割を終っていることを知ったとき，その失望は大きかった。[19] 福沢の偉大さは，この絶望を超えて，英学修得に新たな情熱を燃やしたところにある。こうした彼の勇気のある，しかも臨機応変の態度が，万延元年，咸臨丸に便乗して歴史的なアメリカ渡航に加わることを可能にした原動力ともいえる。また文久元年（1861年）にも幕臣として，ヨーロッパ随行を命じられている。元治元年（1864年）には，福沢は，正式に幕府の翻訳方としての職責に任じており，一方において中津藩士としての身分と他方において幕臣という二重の籍をもつという矛盾した関係にあった。つまり，藩の命令によって中津藩屋敷に藩の子弟のための蘭学塾を経営しながら，他方において，蘭学から英学への転換をはかりつつ，幕府の権威を籍り，あらゆる機会を利用して，きわめて貪慾に海外の新知識を摂取しようとする柔軟な態度こそ，福沢の生涯の生き方のある一面を象徴しているものとして記憶するに値しよう。

福沢は，安政6年，当時，開港されたばかりの横浜を見物して，今後，英学でなければ，西洋の学問を修得しえないことを洞察し，[20] やがて幕府の蕃書取調所に入り，英学への関心を深めたのであったが，しかし何といっても，ヨーロッパへの眼を大きく開かせる契機となったものは，万延元年

注(16)　これについて，福沢は，つぎのように興味深くのべている。「とにかくに当時緒方の書生は十中の七八，目的なしに苦学した者であるが，その目的のなかったのがかえってしあわせで，江戸の書生よりもよく勉強ができたのであろう。ソレカラ考えてみると，今日の書生にしても，あまり学問を勉強すると同時にしじゅうわが身の行く先ばかり考えているようでは，修業はできなかろうと思う」（自伝，82頁）。

(17)　福沢は，つぎのように書いている。「こんなことを思えば，父の生涯45年のその間，封建制度に束縛されて何事もできず，むなしく不平をのんで世を去りたるこそ遺憾なれ。また初生児の行く末をはかり，これを坊主にしても名を成さしめんとしたるその心中の苦しさ，その愛情の深さ，私は毎度このことを思い出し，封建の門閥制度を憤るとともに，亡父の心事を察してひとり泣くことがあります。私のために門閥制度は親のかたきでござる」（自叙伝，8頁）。しかしながら，このような「反封建」の思想は，そのまま直ちに，自由主義とりわけ経済的自由主義に結びつくものではなく，多分に心情的なものであり，むしろ，のちに「和魂洋才」と呼ばれた明治初期の開明的人間像形成の母胎を形づくるエスプリであったことに注目する必要がある。

(18)　自伝，83頁。

(19)　自伝，87頁。

1月，日米修好条約批准のため，軍艦咸臨丸に便乗し，アメリカに派遣されたことであって，ここで福沢は，ヨーロッパ（アメリカ）文明のすばらしい状況に接し，ますます日本の立ちおくれを意識し，ヨーロッパへの関心を深めたのであった。福沢は，68年にわたるその生涯において，3度の外遊を経験している。第1回は，すでにのべた万延元年（1860年），咸臨丸に便乗してのアメリカ行きであり，第2回は，文久元年（1861年）ヨーロッパ使節派遣の旅行，第3回目は，慶応3年（1867年），幕府軍艦受領のための2度目の渡米であった。われわれが，彼の経済学研究にかんして注目すべきは，この3度目の外遊，すなわち2度目の渡米である。この渡米において，福沢は実に夥しい数量の原書をアメリカで購入し，これを日本への土産物としたからである。

福沢は，最初の渡米において，通訳として同行した中浜万次郎とともに，ウェブスターの辞書を購入したとのべているが[21]，最初の渡米の機会には，資金も充分でなく，書籍にまでは到底及ばなかったと思われる。帰国後「華英通信」の翻訳出版[22]を行うなどして，その実力も評価され，ヨーロッパ諸国への使節派遣の一行に加えられたときには，幕臣として400両という，当時としては莫大な金額を与えられている。そのうち300両が旅費に当てられたのであるが，これによって福沢は，ロンドンで，「ただ英書ばかり買ってきた」とのべている[23]。しかしそのような福沢の記述にもかかわらず，彼がこのとき，どのような書籍を購入してきたのかは必ずしも明らかではない。今日伝わる遺

注(20)「横浜から帰って，私は足の疲れではない，実に落胆してしまった。これはどうもしかたがない。いままで数年もの間死にもの狂いになってオランダの書を読むことを勉強した，その勉強したものがいまはなんにもならない，商売人の看板を見ても読むことができない。さりとはまことにつまらぬことをしたわいと，実に落胆してしまった。けれども決して落胆していられる場合ではない。あすこに行われていることば書いてある文字は，英語か仏語に相違ない。ところでいま世界に英語が普通に行われているということは，かねて知っている。なんでもあれは英語に違いない。いまわが国は条約を結んで開けかかっている。さすればこの後は英語が必要になるに違いない。洋学者として英語を知らなければ，とても何にも通ずることはできない。この後は英語を読むよりほかにしかたがないと，横浜から帰った翌日だ，一度は落胆したが，同時にまた新たに志を発して，それから以来はいっさい万事英語と覚悟をきめて，さてその英語を学ぶということについてどうしてよいか取付端がない……」（自伝，87—88頁）。

(21) ジョン万次郎とともに，福沢が買ってきたウェブスターの辞書は，岩崎克己氏の研究によって，大辞書ではなく，つぎのような抄略版であることが明らかにされた。N. Webster, An explanatory and pronouncing dictionary of the English language. With synonyms. Abridged from the American dictionary of Noah Webster. By William G. Webster, assisted by Chauncey A. Goodrich. With numerous useful tables. New York, Mason Brothers, 1850, 8°, 490 pp.

(22) この「華英通語」は，福沢全集第1巻の冒頭に載せられ，文字通り，福沢の著作活動の第一歩を印したものであるが，これについて，福沢はこの著作が，漢学者流の闕字の弊におちいったものであることを反省し，つぎのようにいわば自己批判をしている。

「安政5年余が江戸に来りて出版したるは華英通語なり。是れは翻訳と云う可き程のものに非ず，原書の横文字に仮名をつけたるまでにして事固より易し。唯原書のVの字を正音に近からしめんと欲し，試にウワの仮名に濁点を附けてヴヴと記したるは当時思付の新案と云うべきのみ。夫れは扨て置き，此書を出版して後に独り自ら赤面して遺憾なりと思ひしは，其凡例を漢文に認めたること，皇国又本邦の文字に闕字したることなり，畢竟原本が支那人の手に成りて却て漢文なりしゆえ自然に之に釣込まれたるか，左りとは緒方先生の訓に背くものなりと心甚だ安からず。又闕字の事は果して国法の命ずる所なるや否や，此辺の吟味もせずして漫に世間の先例に倣ふたるは習慣の奴隷たるにすぎず，是亦軽率の至りなり。（福沢諭吉全集，第1巻（岩波書店），1958年，24～25頁。）

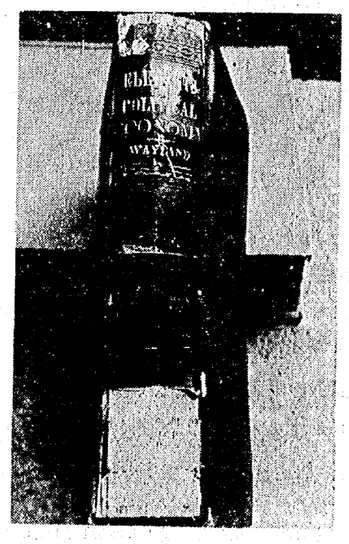
しかしそれにしても，この華英通語が，蘭学に失望して英学に転換した安政6年から間もない万延元年の出版であることを知るとき彼の英学にたいする並々ならぬ精進のほどを偲ぶことができる。

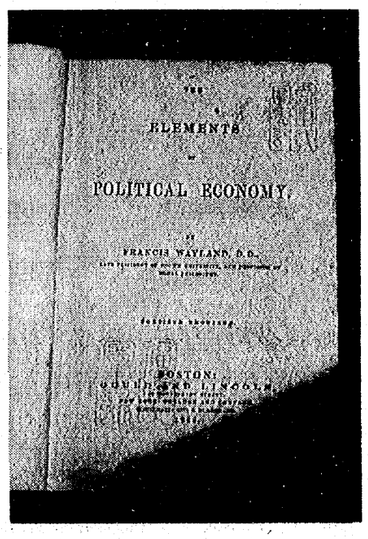
(23) 自伝，112頁。

品「英清辞書」（English and Chinese Dictionary, by W. H. Medhurst, Sen Shanghae; printed at the Mission Press, 1847, がそれであるといわれるが，そのほかは明らかではない[24]。

わが国の最初の遣欧使節，竹内下野守の一行は，約1年間にわたり，フランス，イギリス，オランダ，プロシア，ロシア，ポーランドなどのヨーロッパ諸国をまわり，開市開港延長の件を果し，樺太境界確定のことは充分にその使命を果さなかったにしても，ともかく，ヨーロッパの至るところで，病院，動植物園，博覧会，天文台，学校，博物館，盲唖瘋院，電信局，銅鉄器械局，獄舎，老兵院，製鉄局，鉄筆局，議事室，貨幣局，運上所，磁器局，玻璃局，図書館など，もろもろの社会施設，諸工場類を視察して，大いに見聞をひろめたのであった。このヨーロッパ旅行において注目すべきことは，福沢とともに，福地源一郎，松木弘安，箕作秋坪などの，のちに明治の文化に大きな影響をあたえた先達たちが加わっていたことであろう。そしていまひとつは，ヨーロッパの文物制度，とくにその代議政治には深い関心を示していたことがうかがわれる。だが，このヨーロッパ旅行が，福沢の思想に深甚な影響をあたえ，名著「西洋事情」はまさしくこの体験をもととしてまとめられたものであるとしても，経済学研究への動機は，第3回目の外遊，すなわち再度の渡米によって，はじめて決定的なものとなったことである。

この再度の渡米にあたっては，福沢はあらゆる無理算段をして，また友人からの依頼に応じて，約2,000両ほどの金額をもって洋書の購入にあて，書籍箱だけでも，茶箱のような大きな箱で12





この Wayland の The Elements of Political Economy は，1866年版であり，「福沢氏図書之印」という捺印が，左下にみられるところから，福沢が，日常使用したものといわれている。

注(24) 百年史（上）168頁。

箱に達したといわれる。このなかには，大小の辞書類をはじめとして，地理書，歴史書，法律書，経済書および数学書に至るまできわめて広汎にわたったが，しかし，実際にどのような書物がふくまれていたかは，一覧表は残っていない。ともかくこのなかに，日本の経済学の輸入に大きな役割を果した The Elements of Political Economy, by Francis Wayland, D. D. が入っていたことは事実であり，そのほか，J. S. Mill の Principles of Political Economy なども入っていたが，実にこの Wayland の経済書が，福沢による慶応義塾における経済学の教育および日本の経済学研究において果した役割はまことに大きなものがあった。[25]

では，この当時，慶応義塾の教育は，具体的にどのように行われていたのであろうか。明治元年(1868年) 版「慶応義塾之記」の付録の日課表によれば，

日　課

1.	エーランド氏 経済書講義	火曜日　木曜日　土曜日 朝第十時より	福沢諭吉
1.	クァッケンボス氏 合衆国歴史講義	月曜日　水曜日　金曜日 朝第十時より	小幡篤次郎
1.	同 窮理書講義	月曜日　木曜日 午後1時より	村上辰次郎
1.	パルレイ氏コモンスクール 万国歴史会読	火曜日　金曜日 午後第1時より第4時迄	小幡甚三郎
1.	クァッケンボス氏 窮理書会読	水曜日　土曜日 午後第1時より第4時迄	永島貞次郎
1.	コヲミング 人身窮理書会読	月曜日　木曜日 午後第1時より第4時迄	松山棟庵
1.	コルネル氏ハイスクール 地理書素読	日曜日の外毎日 朝九時より第十時迄	小幡篤次郎
1.	ベイトルパルレイ氏 万国歴史素読	日曜日の外毎日 朝九時より第十時迄	永島貞次郎
1.	スミス氏 窮理初歩	日曜日の外毎日 朝九時より第十時迄	村上辰次郎
1.	文典素読	日曜日の外毎日 朝九時より	小幡甚三郎 松山棟庵 小泉信吉

明治2年 (1869年) 再版の「慶応義塾之記」付録の日課表によれば，明治元年版に比べ少なからず改訂されている。[26] Wayland の経済書を教材とする福沢の講義は，ここにみるように，火，木，土の3回開講されたことがわかるのであって，「出島は年来オランダ人の居留地で，欧州兵乱の影響も日本には及ばずして，出島の国旗は常に百尺竿頭に翻々としてオランダ王国はかつて滅亡した

注(25)　この点については，杉原四郎「西欧経済学と近代日本」(未来社)，1972 年，第1部導入初期の諸相，をみよ。

(26)　明治2年の改訂によって，Wayland の経済書の講義は，福沢に代って，小幡篤次郎が月，木曜日の第1時より行い，福沢は，水，土曜に，Wayland, Elements of Moral Science, 1835 によって，修身論講義を行っている。またのちに自由民権運動に参加し，アメリカに亡命して悲惨な最後をとげた馬場辰猪が，この時期に福沢に私淑し，地理書会読の授業を担当しているし，後に塾長となった小泉信吉も，阿部泰造とともに，合衆国歴史会読を担当していることが，注目をひく。

ることなしと，いまでもオランダ人は誇っている。シテみるとこの慶応義塾は日本の洋学のためには，オランダの出島同様，世の中にいかなる騒動があっても変乱があっても，いまだかつて洋学の命脈を絶やしたことはないぞよ。慶応義塾は一日も休業したことはない。この塾のあらんかぎり大日本は世界の文明国である。世間にとんちゃくするな」と喝破して，[27] 年少の子弟を励ました日は，明治元年5月15日であって，この日が丁度土曜日であったのと符合する。またこの講義内容をみて明らかなことは，経済学を中心に，歴史および地理，物理学，万国史などをはじめ，のちには，倫理学の基礎なども教授している。従って，福沢の経済学研究への関心は，最初はいわゆる洋学一般のなかで，他の多くの学問分野と同じ地位をあたえられていたのであるが，やがて研究の深化とともに，経済学への関心が一層強まったと考えるのが妥当であろう。

明治2年8月の「慶応義塾新議」の中に定められた「義塾読書の順序」によれば，入社してまず英語入門の手ほどきをうけ，次いで物理学の初歩か，文法書を読む。これを3ヶ月くらいで仕上げ，引きつづいて地理書または窮聖書を6ヶ月かけて読む。最後の6ヶ月には歴史書1冊を読むというようにして，第一段階を終り，つぎに独学自習の課程がはじまり，師弟ともに教え合うという状態のなかで研究がつづけられたのであるが，とくに Wayland の経済書，すなわち，The Elements of Political Economy, 1866 は，広く読まれ，福沢に大きな影響をあたえたと思われる。

(3)

この書の著者 Wayland は，アメリカ合衆国ロード・アイルランド州プロヴィデンスのブラウン大学において，28 年間の長きにわたって，その総長をつとめた人といわれ，この書は 1837 年に初版が出され，1840 年にはその摘要版 (Elements of Political Economy, obridged and adapted to the use of Schools and Academies) が出されている。[28] 福沢が，慶応義塾の経済学のテキストとして用いたのは，彼がアメリカから買ってきた 1866 年版すなわち 40 版で，発行以来 30 年間に 5 万部が売れたというほどの普及ぶりで，啓蒙的な教科書として，一般に広く読まれたのであった。いまその1871 年版について目次をみると，つぎのような内容から成っている（但し大項目のみ)。

序論　定義および対象の分類 (Definitions and Divisions of the Subjects)

第1篇　生産について (Of Production)

第1章　資本について (Of Capital)

第2章　産業について (Of Industry)

第3章　資本にたいする労働の適用を支配する法則について (Of the Laws Which Govern the

注(27)　自伝，188 頁。

(28)　高橋誠一郎「随筆慶應義塾」，なお，ここで利用したのは，1871 年版であって，1834 年および 1840 年版は，慶應義塾図書館には所蔵されていない。Francis Wayland, The Elements of Political Economy, 1871.

Application of Labor to Capital)

第2篇　交換 (Exchange)

第1章　物々交換 (Barter, or Exchange in Kind)

第2章　金属通貨による交換 (Exchange by Means of a Metallic Currency)

第3章　紙幣通貨の手段による流通について (Of a Circulation by Means of a Paper Currency)

第3篇　分配について (Of Distribution)

第1章　賃金もしくは労働の価格 (Wages, or the Price of Labor)

第2章　貨幣の価格もしくは利子について (The Price of Money, or Interest)

第3章　土地の価格もしくは地代 (Of the Price of Land, or Rent)

第4篇　消費について (Of Consumption)

第1章　消費の性質およびその計画 (Of the Nature and Design of Consumption)

第2章　個人の消費について (Of Individual Consumption)

第3章　公共の消費について (Of Public Consumption)

以上の目次をみれば明らかなようにいわゆる経済原論の入門書であり，その発行年月日からして，その理論は，イギリス古典学派の強い影響下にありながら，アメリカの経済学の伝統の上に立っていることが理解できる。

Wayland はその序論 (Introduction) において，Political Economy を Science of Wealth であるという。「経済学はそれゆえ，われわれの現在の組織の下で，人間の諸関係が，個人的なものであろうと，社会的なものであろうと，彼の欲望の目的にたいして支配される法律を，体系的に整理することである」[29]。そして人間の慾望を満たす財貨の性格をもって，本来的価値 (intrinsic value) としており，その交換する能力を，exchangeable value としている。それ自体として絶大な価値はもつが，exchangeable value をもたないものとは異なり，exchangeable value をもつものは，人間の労働の産物としている。ここにわれわれは，Wayland が，古典派経済学の影響をうけていることを知るのであるが，さらに具体的にどのような系譜関係を古典学派との関連においてもつかを検討する必要があろう。

緒言 (Preface) において，「政治経済学の諸原理が，道徳哲学のそれと非常によく似ている」(Preface, IV) とし，また Adam Smith の「分業論」にもとづいて，その理論を継承し発展させているのも興味深い。しかし価値論の分析は不徹底で，Ricardo 以後の古典派経済学の解体と俗流化のなかでの理論的混乱，すなわち労働価値説と生産費説との混淆，たとえば，資本の生産性の強調などが，価値論の中心を成しており[30]，1848 年の Mill の「経済学原理」以後の研究状況を反映している。

注(29)　Wayland, ibid., p. 15.
(30)　Ibid., pp. 35～36.

また賃金についても，人口と賃金について，古典学派が伝統的に固執しつづけ賃金基金説は放棄されており，ほとんど問題とされていない。むしろすでに資本が潤沢で企業活動が活発であった合衆国の経済状勢を反映し，Malthus の人口論は拒否され，賃金は，労働市場における労働力をめぐる資本間競争がこれを決定するという楽観論が支配的であるといえよう[31]。地代論においても，リカードウの差額地代論は，アメリカにはうけいれがたいとしているが，全体として自由放任主義と楽観的風潮が支配的である。

このように，Wayland の経済学が，イギリス古典学派の基調をなす経済的自由主義のアメリカ的適用であったとすれば，それは，福沢の思想にどのような影響をあたえたのであろうか。

（4）

幕末維新の時期の福沢の思想はきわめて複雑である。すなわち，開国と攘夷の相対立する勢力の渦まくなかで，徳川幕府の命運がもはや尽きようとするのを彼が意識しないはずはなかった。しかしそれにもかかわらず，彼は幕臣としての意識から，「諸大名を集めてドイツ連邦のようにしてはどうか」とか，あるいは，「今日われわれどもの思うとおりをいえば，正米を年に二百俵もろうて，親玉（将軍のこと）のお師匠番になって，思うように文明開国の説を吹き込んで，大変革をさしてみたい」というような説をとなえている[32]。ところが，数年後に人に与えた手紙の中で，この「大君同盟」の説に強く反対して，どうしても「大君の モナルキ」でなくては，「大名同士のカジリヤイ」に終って，我が国の文明開化は進まぬといい，それは「一国の文明開花を妨げ候者にて，即ち世界中の罪人，万国公法の許さざる所なり」とまで極言したといわれる[33]。

明治維新政府の成立にあたって，幾多の危惧の念を表明しながら，一度改革が始められるや，その迅速果敢な措置にたいして驚嘆し，維新政府を熱烈に支持するに至ったことは，彼の開国論と君主論とが一致したからにほかならない。と同時に，福沢の慧眼をもってしても，攘夷論の本質はこれを見抜くことができなかったことを意味する。従って重要なことは，福沢の経済学をも含む洋学研究は，以上の説明からも明らかなように，封建体制の絶滅，すなわち近代的民主政治の確立に直接に結びつくものではなかったことである。こうしたなかではじめられた彼の経済学研究，とくに Wayland の経済学が，もし日本の政治的変革の過程と結びつくものがあるとすれば，「実学」としてしかありえなかったことは当然であろう。

われわれは，福沢の「西洋事情外編」には，この Wayland の一部の邦訳されたものを見出すこ

注(31)　Ibid., p. 301.
(32)　自伝，166 頁。
(33)　小泉信三「福沢諭吉」岩波新書，69 頁。

とができるのであるが，とくに巻之三において，経済の総論を論じ，自説を積極的に展開している点が印象的である。とくに，経済学をもって自然科学と同一視して，つぎのようにのべている。「経済学は元と人為の法に非らざること瞭然たり。其学の趣旨は，自ら世に行はるゝ天然の定則を説くのみなるが故に，経済の定則を説くは，猶ほ察地学において地性を論じ，医学に於て病理を明かにするが如し」[34]。このような経済学の規定は，私有財産制度を，あたかも自然現象の如く，絶対にして動かすことのできないものとする彼の主張，すなわち，「私有の本を論ず」，「私有を保護する事」，「私有の理を保護する事」等の諸論となってあらわれ，利潤と地代との関係をつぎのように論じている。

故に地面を買て其地に品位を増すときは必ず利潤なかるべからず。所謂地代なるもの是なり。地代の利は人為の国法を以て定めたるものに非らず，天然の然らしむる所にて，猶ほ水の低に就くが如し。国法の主宰は，唯其の地面の主人を定め，其授受売買の規則を正だすのみ。抑も些少の功労もなくて地代の利潤を一人に附与するは理なきに似たれども，其来る所を尋れば，元と人の物を奪ひしにも非らず，亦他人の力を労役せしにも非らざれば，前条にも記載せる道理に従ひ，之を其主人に与ふるを以て至当の処置となせり。

福沢が Wayland の経済学から大きな影響をうけたことはすでに指摘したところであるが，とくに彼は，Wayland の Elements of Political Economy の「第4篇消費について」のうち，「公共の消費について」のところを邦訳している点に，われわれは大きな興味をおぼえる。

Wayland の収税論をつぎのように紹介している。

一国の公費を給するの法を論ず

収税の主意を論ず

一国の財を費す可き公務を論ず

第一　政府を維持するが為めに財を費す事

第二　人民を教育するが為めに財を費す事

第三　宗旨を護持するが為めに財を費す事

第四　国内の営繕に財を費す事

第五　貧人救助の為め財を費す事

一方において私有財産制度を動かすことのできぬ自然の理として考え，他方，国家権力の財政的基礎を，Wayland によって理論的に明らかにしようとしているのであるが，しかし現実の政治過程は，このような福沢の理論をどの程度までうけいれたのであろうか。

明治初年において，維新政府が遂行した政治経済過程のうち，初期のもっとも重要な政策，たとえば版籍奉還（明治2年），廃藩置県（明治4年），土地売買禁止令の解禁（明治5年），富岡製糸場開業

注(34)　福沢諭吉全集第一巻，西洋事情外編，巻之三。

（明治5年），国立銀行条令（明治5年），徴兵令の布告（明治6年），地租改正条令の布告（明治6年），民撰議員設立建白書（明治7年）は，部分的には，福沢をはじめとする初期の啓蒙思想家の影響を見出しうるとしても，全体的な関連は明らかではないように思われる。むしろ現実の政治過程がきわめて急速に進み，福沢は，逆にそれから深刻な影響をうけたことも少くなかったことも考えられる。そうした相互作用のなかで，福沢の経済思想も形づくられていくのであるが，この点を明らかにするためには，さらに深く明治初期の経済学の研究状況とその政治・経済過程との関連を追求するなかで明らかにされなければならない。

〈追記〉　この論文を書くにあたり，Wayland の書物およびその他の重要史料の閲覧につき，慶応義塾図書館副館長石川博道氏ならびに三田情報センター部長伊東弥之助氏に大変お世話になったことを記し，感謝の気持をあらわしたい。

もともと私の研究領域は，労働問題・社会政策と呼ばれる分野であるが，経済思想史・経済学史の研究にも関心をもち，経済学史学会にも所属させていただいている。しかしこの間，経済学史の研究は，担当講義が，社会政策論や労働運動史論であったこともあり，遅々として進まず，経済学史学会員にふさわしい論説は何ひとつ発表することができなかった。ところが今度の大学改革の結果，経済学部は，「専攻分野方式」がとられることとなり，私は，社会政策論の講義とともに，経済学史の講義も，本人の希望と専攻分野のメンバーの承認があれば担当しうることとなった。その結果，私は日本経済学史を担当するということになったのであって，こうした機会を与えて下さった先輩・同僚の皆さんに感謝したいと思う。

私はかねがね，大学改革なるものは，研究者が自己の学問をもって学生に答えることを心底から願うことから発するものであり，制度改革は，いわば末梢的な問題であると考えていたし，今もこの態度を間違っているとは思っていない。ところが，最近，この本質的問題から離れて，制度改革だけに熱中する人々が増加しつつあるような傾向がみられることは，まことに残念というほかはない。くり返すが，制度改革は，大学改革のもっとも本質的な部分ではなく，せいぜい第2次的問題であるということである。

（経済学部教授）